

団塊が団結 活性化目指す



2000年を最後に実施されていない伊平屋村人会の運動会。再び実施できる日を目指している（同会提供）

例えば、会員の交流・親睦を目的に、二年ごとに開かれていた運動会は、二〇〇〇年を最後に実施されていない。

こうした組織力の低下は、新会長ら後任役員を輩出できず会の引き継ぎがでないという状況も生み出している。

だからこそ高良武美事務局長(58)は「活動を絶やしたくない。自分たちの時代につぶしたくない、つぶしたと言われたくない」と会の活性化を模索する。

思いを同じくする宮城富夫さん(55)（上城技術情報社）は「宜野湾市」代表は会や村の支援活動に奮闘する一人。自社のホームページに村関係者の企業を掲載するなど、会員意識の拡大や活性化に力を注ぐ。東江米男さん(62)はチャリティーポウリング大会の開催など、世代間を超えたイベントで郷友意識を広げたいと試みている。



⑫

伊平屋村人会は田名、前泊、我喜屋、島尻、野甫の五つの字の郷友会が集まり、一九七九年に結成された。しかし、各字単位の活動停滞に伴い自然消滅しかねないほど厳しい状況に直面している、という。

けん引役だった結成当初の世代は高齢化などで会を離れつつある。若い会員は郷友意識が希薄になり、逆に居住地域の活動が盛んになってきたこともあり、会活動に参加する機会が少なくなっている。

【データ】那覇市、浦添市、宜野湾市を中心に約200世帯の会員がいる。問い合わせは宮城富夫さん、電話080(1795)7937。

会の復活への道のりは険しいが「団塊世代が団結し合い、行動すれば可能だ」（高良事務局長）と、あきらめてはいない。

毎週金曜日に掲載